

大学入学共通テストの出願状況

10月15日、大学入試センターは、令和3年度大学入学共通テストの出願状況を発表しました。10月14日現在で出願総数は535,244人、内訳は高等学校等経由(高等学校等卒業見込者)が449,789人、個人直接出願が85,455人です。

さらに受付処理の終わっている人数は、531,907人で、そのうち令和3年1月16日(土)及び17日(日)の第1日程を選択したのは531,118人(高等学校等計出願447,673人、個人直接出願83,445人)、1月30日(土)及び31日(日)の第2日程を選択したのは789人(高等学校等計出願788人、個人直接出願1人)でした。

文部科学省が高校に依頼した7月の調査では、現役生の受験見込み者約46万人のうち、第1日程が約43万1千人、第2日程は7%にあたる約3万2千人が希望するとしていましたが、実際に選んだのは0.2%でしかありませんでした。

これは第2日程を選択した場合、大学の個別試験までの準備期間、即ち勉強時間が短くなるというデメリットの方が強く働き、ほとんど出願者が第1日程を選択する形になったためです。また、多くの高校が夏休みを短縮したり、土曜日に授業を行ったりすることで、学習の遅れをほぼ取り戻せたことも大きな要因です。

本校の受験生は、スタディサプリを用いて受験科目の試験範囲を早くに終わらせることができますので、後は演習問題を行って実践的な力を養ってほしいと思います。

大学入学共通テスト 濃厚接触者も受験可能

政府は10月15日、新型コロナウイルス感染症対策分科会を開催し、大学入学共通テストの感染防止対策を協議しました。その協議を受け文部科学省は、大学入学共通テストにおいて無症状で陰性が確認されることを条件に濃厚接触者の受験も別室で認めるとしました。その条件とは次のとおりです。

- ① PCR検査で陰性を確認
- ② 試験当日も無症状
- ③ 公共交通機関を利用せず、人が密集する場所を避けて試験会場に行く
- ④ 試験当日、終日別室で受験

また、試験室では座席間の距離を確保し、1科目終了ごとに10分程度の換気をするなどの感染防止を図ります。

文部科学省は6月に示した入試に関する指針では、感染者に濃厚接触した人は14日間の健康観察が求められ、この期間中の受験は認めないとしていました。今回のとりまとめでは大学入試共通テストだけでなく、国公立大学、私立大学の個別試験でも同様の対応を求めています。

「優良大学」と「幻滅大学」とは

10月に本校を卒業した複数の大学生が校長室を訪れました。学生たちの近況を尋ねると、やはりコロナ禍で、大学に行くのが週1回とか、一年間授業がすべてリモートになったとか、学生たちからの大学に対する不満を聞く機会になりました。また、他に見聞きした学生の不満や苦言の一例を記しておきます。

- ・大学が封鎖されているのでアパートを引き払い、実家に戻った。
- ・大学は休校だが帰国できない。(留学生)
- ・当初に課題図書を示されレポートを提出するだけの授業がいくつかある。
- ・大学の学生課に電話しても、業務時間が短くてなかなか繋がらない。
- ・ほとんどリモートで大学に行っていないのに授業料が高すぎる。
- ・レポートばかりでパソコン漬けになっている。
- ・大学に通っていないので友人ができない。
- ・休学、退学を真剣に考えている。
- ・学生は学内に立ち入れないのに、オープンキャンパスは実施されている。
- ・提出した課題に対して教授からのリアクションがない。
- ・実技科目だがオンライン授業で身につくとは思えない。
- ・リモートできない教授のレポートの課題量が多すぎる。
- ・高校の卒業式もなく、大学の入学式もなかった。

など、授業から学生生活まで、学生から多岐にわたる声が上がっています。大学によっては学長や学生課長が、学生の声をリモート等で聞いて回答している学校もあります。学生や保護者と対話なしで課題は解決しません。学生、保護者の声を聞くことが第一歩になります。

ここに記した題目の「優良大学」と「幻滅大学」とは、最近用いられている用語ですが、決して偏差値や就職実績などで大学を評価して用いられてはいません。簡単に言うと「優良大学」とは、学生に寄り添う姿勢のある大学、「幻滅大学」とは学生に寄り添う姿勢が見えにくい大学と言えるでしょう。同志社大学商学部 佐藤郁哉教授が経済誌の特集「コロナで見えた優良企業と幻滅企業」から、もじって「コロナで見えた優良大学と幻滅大学」と表して使いました。さらに佐藤氏は、「コロナで見えた優良大学と幻滅大学」は、「できることからすぐに始めた大学、できない理由を探し続けた大学」と言い換えることができると言っています。佐藤氏は、今回のコロナ対応は各大学の組織体質とリーダーシップのあり方を如実に示したと言っています。大学にとって最も重要な「ステークホルダー」である学生に対し、どう向き合ってきたかが明らかになったのではないかと言っています。このことは、今回のコロナ禍のなかで学校経営を担う校長としても身につまされる話です。私自身、3月からの休校期間中に生徒にどのように向き合ってきたのか、いまコロナ禍の途中ですがリフレクションし、新たな策を打ち出しながら学校を運営していかななくてはと思っています。

大学を選択する物差しとして、学生に対してコロナ禍で如何に対応したのかが大きな要因になると思います。例えば、現在、どのくらい対面授業を実施しているのかを大学に尋ねるのも一つの知る方法でしょう。